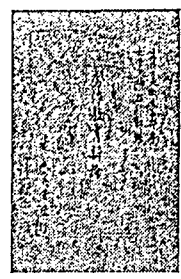


『労作教育新論』

一九三三年二月
成美堂

山崎 昌甫



1 なぜ労作教育「新」論なのか

この著作は新たに労作教育論を提唱しようとするものではない。「ペビロンの迷宮」といわれるぐらゐ諸説紛々たる労作教育論にも、共通した「一つの動き、発展」の方向がある。労作教育論として「何等かの秩序」があるはずである。もしそれがあるとすれば、とうぜん「秩序」を一貫する「理念」といふべきものが見出せるはずである、という「予想的な設問」から出発する。このような視点に立ってこれまでの諸論、諸説を各論として批判、検討し、これを整理、統合して「概念的な考察」を展開する。この野心的な企てが労作教育「新」論という書名を選ばせたのではあるまいか。

2 何を共通した「一つの動き」ととらえたか

労作教育運動は、個性教育運動、合科教授運動、共同社会

が新教育思想の一つを代表するものとしてとらえられる。

3 労作教育論の「発展」の方向

ところで、いわゆる「労作学校運動なるものはこのドイツにおいて新教育運動の核心をなしたものであった」。労作学校運動の代表者ケルンシュエンシュタイナーは、デューイの「聞く学校から働く学校」という標語にならって「書物学校から労作学校へ」というスローガンを掲げ、「ベスタロッツの精神に基づく将来の学校——労作学校」を、ドイツ新教育運動の発展方向とした。

他の新教育運動がそうであるように、労作教育論における「労作の原理」も、当初は「他の諸運動の提示する多くの原理を統合したもの」であった。しかしドイツではそれが「新教育方法上の諸原理」の中核にすえられている以上、「労作の原理」が他の新教育理論との関連でどのような独自の意味と位置とをもっているかが明らかにされなければならない。この著作では、「労作の原理」の独自の意味の追求を「陶冶理想としての『労作』」、「陶冶方法としての『労作』」といふ表題の下で、新教育理論に共通する原理の中で占める「労作の原理」の位置は「労作と自由」「労作と体験」「労作と共同社会」そして「労作と郷土」の中で対比的に明らかにされている。

ところで第一世界大戦前後のヨーロッパ思想界の変転はめ

学校運動、そして郷土教育運動とともに、反ヘルバルト主義運動、つまり新教育運動の一翼を担うものであり、したがって「ヘルバルト主義教授法に対する徹底的革新」を共通の課題にしていることをまず明らかにする。

十九世紀末から二十世紀初頭にかけての思想界は、合理主義に対する非合理主義の強烈な挑戦の時代であった。教育の領域におけるそれは、P・ナトルプの「主意的自発主義的教育説」の唱導、J・デューイの「近代労作教育運動の最初の宣言」、E・ケイの「児童中心主義」の高唱に代表されるように、教育の「伝統的な思想及び実際の最も完備した理論的代弁者」としてのヘルバルト派を「攻撃の先表に立して、ヘルバルト教授理論の特質である「主知主義、形式主義、機械主義、注入主義」に対する徹底的な教育改革論であり、そういう意味でルソー、ベスタロッツの教育思想の復興を共通目標にしていることを、思想的に明らかにする。労作教育論

まぐるしかった。とりわけ敗戦国ドイツでのそれは激しかった。この著作では、一つの「秩序」としての「労作の原理」を、とくにドイツ労作学校運動のリーダーであり最高の労作教育理論家であるケルンシュエンシュタイナーの「労作学校の概念(Begriff der Arbeitsschule)」を中心に総括している。この書物は一九二二年に初版が、そして一九二五年に改訂・増補された第六版が出されている。彼の「労作の原理」は、とくに大戦後とりわけワイマル体制の崩壊過程の中で改訂・増補で、ある意味で一つの「秩序」として完成する。

4 新教育の理論としての労作教育論の評価

「以上のように理想主義的な意味で労作を解し、またこのように動的な意味で職業陶冶を解する限りに於いて労作——職業は一般に教育の根本的な目的の原理となり得る」「労作学校の理念はブルジョア的要求とプロレタリア的要求の出会いによって初めて充分な形を得るに至った……この二つの要求の統一が今日における程痛切な必要事として感ぜられ、今日程それが一切の問題の中核をなしている時代は未だかつて存しなかった」、という労作教育の目的論についての現実的な評価と、「労作教育論は実に思想界の動きを映す鏡である」、という労作教育というより新教育運動全体のもつ本質についての醒めた把握が、この著作で「概念的な考察」を可能にしたのではあるまいか。

(職業訓練大学校)